

## 第11回作業科学セミナー 特別講演

### メインストリームへ：作業科学を見えるように

Alison Wicks

オーストラリア作業科学センター管理者、健康・行動科学上級講師、  
ウーロンゴン大学健康サービス発達センター名誉特別研究員

吉川 ひろみ (日本語訳)

県立広島大学保健福祉学部作業療法学科 教授

港 美雪 (編集)

吉備国際大学保健科学部作業療法学科 教授

#### はじめに

作業科学(OS)を見えるようにすることは、OSを社会の主流(メインストリーム)とするための一歩となる。OSがメインストリームとなったならば、専門職の実践により多くの情報を効果的に提供することができ、社会の政策に貢献することができる。OSからの情報を得た実践や政策は、作業ニーズを強調することで人々や地域によい影響を与えることができる。

本論でいう「メインストリーム」とは一般住民の間での一般的な考えになるというだけでなく、個人、集団、社会に関する理解を高め知識を蓄えている社会科学や人文学の部類に入ることである。OSがメインストリームになることは、作業の視点の促進を助けることになる。作業の視点の促進は一般住民や他領域の学問が世界を作業的に見ていくことを奨励し、人生の中心に作業をおいて考えるようになる(Wilcock, 2006)。OSがメインストリームになることの利益は大きい。

OSがメインストリームとなったなら、社会科学や人文学はOS研究者によって提唱された概念や概念構成を探究し吟味し始めるだろう。他領域からの批判的論考は考えを深めることとなり、作業の概念のさらなる発展を助けるだろう。実際に、人間の人文科学的見方を共有する領域の考えを統合していくことは、作業の複雑な現象を説明するためには必要であると、OSの創始者たちは認めていた(Yerrxa, 1989)。しかし、OSがメインストリームになるというのは新しい考えではないにしても、未だに現在のOS研究者の大部分は作業療法士である。

OSをメインストリームにすることは、作業についての学際的協働を促進するだろう。焦点化されたプロジェクトや研究、研究助成金を得る機会を増やす、様々な技能や興味をもった大規模な研究者チームによ

る共同プロジェクトは、長期に助成金を獲得し易い。作業に関する学際的探究と協働的な作業に焦点を当てたプロジェクトの成果には、OSの知識の増大と、学会や一般社会でのOS科学に対する関心の高まりが含まれる。

OSによって作業の視点に対する一般社会の関心が高まることは、人々が何をするか、なぜするのかを考えることを奨励することになるだろう。作業と健康と環境の関係への気づきが起これば、一般社会は自らの地域での作業機会や作業選択について主張するようになり、地域に根差し、作業に焦点を当てた施設やプログラムを支持するようになる。有権者からのプレッシャーは、地方や国家の政治家に強大な影響を与える。最終的にはOS研究から得られたエビデンスが政策に反映されることが、OSがメインストリームになったことの理想的な成果である。

本論の目的は日本でOSをもっと見えるようにし、メインストリームにしていくという考えを刺激することである。作業の視点を促進するために、私が設立したオーストラリア・ニュージーランドOSセンター(AOSC)の話から始めたい。OSをメインストリームにするために、AOSCが行った戦略として日本でも使えそうなAOSCのプロジェクトを紹介する。AOSCでの私の経験に基づく提案をしたい。これらの提案はOS推進を選んだ日本の人々にも関係するだろう。

#### AOSCについて

オーストラリア・ニュージーランドOSセンター(AOSC)は、OSを地域、国家、世界で見えるようにする推進力として2005年に設立された。AOSCはウーロンゴン大学ショーヘブンキャンパス、ニューサウスウェールズの南海岸にある。ウーロンゴン大学には作業療法学科はなく、OS研究者は私一人である。大学



## 地域社会のための作業に焦点を当てた教育プログラムの実施

健康と作業の関係に焦点を当てた地域教育プログラムの実施は、AOSCがショーヘブンの住民の作業の視点を促進するために最初に採用した戦略だった。「今始めよう」という最初のAOSCのプロジェクトの戦略はこうだ。

「今始めよう」の目的は55歳以上のショーヘブンの住民200名を対象に、退職後に自分が何をするか計画を立てることの重要性と、退職後に地域活動に関わり続ける必要性を教育することである。プロジェクト参加者は高齢者のための地域資源の情報を得る代わりに、自分の退職に何をするか、何をしたいか、しようとしたときのバリアは何かというデータを提供した。

2005年10月から2006年6月までに、20回のプログラムが55歳以上のショーヘブン住民171名に実施された。そのうち7回は55・64歳を対象とした退職準備のプログラムだった。このプログラムは3時間のセッション1回で、ショーヘブンキャンパスで夜に行われた。残りの13回は3時間のセッションを2回で、65歳以上の参加者が参加し易く便利のように、日中にショーヘブン各地のコミュニティセンターで行われた。

「今始めよう」プログラムの最初のセッションの初めに、全参加者は一般情報と作業の興味、地域で行われているプログラムへの参加レベルについての質問紙に回答した。さらにフォローアップデータとプログラムの有効性を評価するための質問紙調査も行った。フォローアップ調査はセッションの約3か月後に、経験のある研究者による電話インタビューで実施した。要約すると、121名の参加者から得られた評価データでは、99%がこのプロジェクトを楽しみ、99%が地域活動への参加が健康に良い影響があることに賛同し、50%の参加者はすでに地域活動に参加していて、新しい活動を行うつもりでいた。インタビュー時には地域活動に参加していなかった11名のうち8名(73%)は将来地域活動に参加する意向を示した。「今始めよう」プロジェクト評価のより詳細な情報と地域の作業に焦点を当てたプロジェクト実施のための提言は、インターネットで得ることができる。

### 学際的プロジェクトの採用

学際的プロジェクトを採用することは、OSをウーロンゴン大学(UOW)でメインストリームにするためにAOSCが採用した重要な戦略である。これまでに

AOSCは健康情報、教育、創造芸術分野の専門家の同僚と協働してきた。それぞれの学際的プロジェクトはたいへん異なるものだった。全部を合わせると、関わったUOWの研究者や学生や、参加した一般の人々にOSが見えるという効果を生みだしている。

「健康なe高齢化」はUOWが助成金を出した小規模な学際的パイロット研究だった。共同研究者は健康情報学の人だった。プロジェクトの目的は、インターネットへのアクセスや利用が、社会的関係を増大することによって高齢者の健康を増進するかを検証することだった。

このプロジェクトには、高齢者がインターネット利用に必要な基本技能の練習することが含まれていた。練習期間中、参加者は補助学生という「相棒」を得た。相棒は研修後の一定期間電話での相談に対応した。プロジェクトの詳細はAOSCのウェブサイトで見ることができる。

「創造的学習と教育」は、また別の学際的プロジェクトで、教育学部と地域にある世界的に有名な芸術センター「バンダノン」との協働プロジェクトである。このプロジェクトは2006年に実施され、大学から助成金を得た。プロジェクトの目的は、教育学部の学生が創造性のプロセスを経験し理解し、学校での実習で教師としての実践に創造性についての新たな理解に反映させることができるようになることである。学生はキャンパスで地元の芸術家と一緒に研修で創造的作業に参加し、芸術センターに引きこもって創造的媒体を使って実験した。実際に行うことを通しての学習と、自らの創造性についての振り返りが、このプロジェクトの重要な要素だった。

学生、スタッフ、地域の発展にとって、このプロジェクトは多くの良い成果が上がった(Wicks, 2007)。OS可視化増進において、プロジェクトについての発表や出版は、文化的感受性の高い状況の役割、創造的作業を通して変化することを支援する地域(Whiteford & Wright St Clair, 2005, Dickie, 2004)、創造的作業を通しての自己実現(Blanche, 2007)といったOSの重要概念への関心を高めることを助ける。

「なんでも作っちゃお」は、教育学部の教員と協働して、ショーヘブンキャンパスの教育学修士の学生を巻き込んで行った。学生は、創造的遊びに利用できる安価なりサイクル品の材料を探すという課題を行った。そして学生は、子どもたち、親、教師に、創造的な遊び作業のためにこうした材料をどのように使うかをやってみせるというワークショップを実施した。こ

のプロジェクトの成果は、健康な活動的な子どもの発達のためには身体的、創造的、認知的作業が重要であることを強調した、親と教師のための本となった。

「デジタルおはなしプロジェクト」はAOSCとUOWの創造芸術学部との協働で行われた。このプロジェクトは芸術デザイン学科の3年生のカリキュラムに組み込まれ、双方向マルチメディアのコースとなった。このプロジェクトの目的は、高齢者が地域に根差した作業に焦点を当てたプログラムに参加することが健康によいという、魅力的で刺激的なデジタル物語を作ることである。学生は3グループに分かれ、グループは高齢者のための地域プログラム6種類の中の一つとして位置付けられた。学生はプログラムに参加し、情報を集め参加者のインタビューを記録し、ビデオや写真を撮った。その後学生はショートストーリーをインターネットを使って作った。これがこのプログラムの主な内容で参加者たちにプログラムの価値について考えてもらうことになる。このプロジェクトの結果は、学生の取り組みを公開したことだった。大学スタッフ、他学生、一般社会は、これに招かれたことになる。公開することは、メインストリームに参加することを通して健やかに老いることについてのメッセージを得る効果的な方法である。

### ネットワーク構築

OSシンクタンクが2006年にAOSCで開催され、国際的ネットワークが形成された。このネットワークは、世界のOS研究と教育プログラムを推進し、さらにはOSの可視化を国際的に進めている。シンクタンクの重要方針は、OS研究者たちにリラックスしてきもちよい状態で顔と顔を向き合わせた会話の機会を提供することだった。

シンクタンクの詳細に関する情報と将来のシンクタンクへの提言については、インターネットで報告書を見ることができる (Wicks, 2006 a)。

### パートナーシップ形成と地域連携

AOSCがOSをメインストリームにするために採用した別の戦略は、地域組織とパートナーになることである。大学地域間連携というこの戦略は、オーストラリア大学地域連携協定の一員であるウーロンゴン大学に承認された。大学地域間連携の重要原則は、大学と地域の相互利益となるような知識と専門性の交換である (AUCEA, nd)。

AOSCは、ニューサウスウェールズの歴史的建造物

と景観の保護を行う法の下にあるヒストリックホームトラストとパートナーとなった。同一家族から女性4世代の家であるショーヘブンのメルーガルも歴史的建造物の一つである。メルーガルは年に1度の芸術祭を開催し、2008年にはAOSCも一緒に「女性がする毎日のことを祝おう」というテーマで参加した。AOSCは、作業の視点をよく描いた芸術作品のための賞を創設した。

一般に公開するためにさらにAOSCは2008メルーガル女性の芸術賞の市場開拓を受け負った。AOSCスタッフは作業の視点と、日常の作業と健康との密接な関係について一般社会に知らせるワークショップに参加した。

### 起業家になること

上述の戦略すべては起業家になる戦略である。Merriam-Webster Online辞書 (2008) によると、起業家とは「ビジネスや事業のリスクを組織化し、管理し、引き受ける」人だと定義している。Hertzら (2005) によれば、「起業家であるとは、創造性、柔軟性、決意といった性質を、生来持ち合わせていることと、生後に学ぶことが組み合わされていることである」。

AOSCで起業家であることは、OSのメインストリーム化を促進する特殊なマーケティング戦略を導いてきた。たとえば、AOSCは専用ロゴを持っており、AOSCがサポートするイベントやプログラムで、ロゴの入った旗を掲げている。マスメディアやラジオインタビューや新聞記事は、すべてOSを「売り込む」助けをしてくれる。

### OSをメインストリームにするための提案

OSをメインストリームにするためのAOSCの旅を振り返ると、起業家精神抜きで成功したものは何もないことに気づく。私にとっては、起業家精神は必要であり、資金不足とOSが相応の価値をもつことを認めさせたいという極めて強い願いが、起業家精神を沸き立たせた。AOSCの物語における起業家精神の重要性に感謝する今、皆さんに提案したいことは、文献に記載されている次のような起業家の戦略を考えてOSを推進する道を探ることである (Hertz et al, 2005, Pattison, 2006, Handy, 2002)。

- 喜んでリスクをとれ
- 殻を破って考えよう
- 屈せずにやり通せ
- 大きな絵を描こう

- 理想をもて
- 「第3の目」で違ったように見てみよう

進行具合を評価し、目標達成に何が効果的だったかを理解するときには、あと知恵はもちろん重要な手段である。AOSCはOSをメインストリームにするという使命の長い旅の途中にあるが、これまでを振り返り、同様の使命をもつ人々に提案する重要な戦略のいくつかをあげてみたい。

- 自分の地域の資源を使おう：大事な技能や専門性は往々にしてすぐ近くにあるものだ。私は、地域の人々は新しいアイデアやどうすれば自分でできるかを学びたがっていたことがわかった。私の経験から、OSの概念に関心を持っている。OSとは何かを理解する準備ができていのである。OSは秀才の学問ではない。ただ私たちは作業についてどのように話すかを知らなければならぬ。そうすれば人々はこれに関わりをもつようになる。
- いつでも作業に焦点を当てた言葉を使おう：人々が作業を基盤とした考えに馴染むことを助ける言葉に一貫性をもたせる。そうすれば自分たちでその言葉を使うようになるだろう。
- 積極的にOSを売り込もう：誰かが先にコンタクトをとってくるのを待っていてはいけない。あなたのプロジェクトを知らせなければと思う人を探そう。
- OSの将来のために、今投資をしよう：連絡や連携の多くは、即座に成果が出なくても、何かを導くものである。以前に連絡をとった人のフォローアップをすることは重要である。
- OSへの情熱を維持しよう：OSが専門職の実践に情報を提供し、社会の政策に貢献する潜在力があると、私のように熱烈に信じているなら、自分の使命に焦点を当て続けることは難しいことではない。1993年にOSを知ってから、作業の視点は私の世界観を広げている。情熱を維持することは私にとってはたやすいことである。
- 大きく考え、小さなことから始めよう：起業家精神を採用することは、OSを効果的にメインストリームにするために重要である。起業家の最初のプロジェクトは小さいものである。資金があっても準備不足の大きなプロジェクトよりも、小さなプロジェクトがたくさん集まった方が、インパクトが大きくなる。池に落ちた小石がさざ波を起こすことを忘れないで、たくさんのさ

ざ波は、大波を作る。

#### まとめ

- オーストラリアでは現在OSは、たとえばメインストリームの中小さな属国にすぎない。OSに関心のある人が日本では増えているとはいえ、この状況は日本でも似ていると思う。しかし、小さいことは大きな計画を立てることを妨害するものではない。AOSC設立と、これまでに実施したさまざまなプロジェクトは、OSを効果的に推進し、メインストリームにする可能性があることを示している。

私はAOSCの物語とこれまでに行ったAOSCのプロジェクトについて簡単に説明した。私がしていることの目的は、皆さんに日本でOSを見えるようにするために、自分の地域で作業に焦点を当てたプロジェクトをどのように発展させていけるか、他領域や組織の同僚たちとどのように協働していけるかを考えてもらうことである。本論の読者が、アイデアを育て、行動を起こす人々を刺激することになればと、希望する。

OSの潜在力を認める多くの人々がこれを推進することが重要であると信じている。今こそ始める時である。遅らせる理由は何もない。今始めよう。

(原文)

## Into the main stream: Making occupational science visible

Alison Wicks

Director, Australasian Occupational Science Centre  
Honorary Fellow, Centre for Health Service Development  
Senior Lecturer, Health & Behavioural Sciences

Making occupational science visible will enable it to become part of the main stream. Once in the main stream, occupational science can more effectively inform professional practice and contribute to social policy. Practice and policy that is informed by occupational science can positively influence people and their communities by addressing their occupational needs.

'Main stream' is used in this paper to refer not only to the popular discourse among the general population but also to the group of social sciences and humanities that advance knowledge and build understanding about individuals, groups and societies. Getting occupational science into the main stream will help promote an occupational perspective. Promoting an occupational perspective will encourage the general population and academics in other disciplines to view the world occupationally and acknowledge that occupation is central to human life (Wilcock, 2006). The benefits of getting occupational science into the main stream are many.

Once in the main stream, social science and humanities academics will start to explore and critique concepts and constructs generated by occupational scientists. Critique from other disciplines will result in a cross fertilization of ideas which will help refine and further develop occupational concepts. In fact, synthesising ideas from disciplines that share a humanistic view of the human was recognized by the founders of occupational science as essential for explaining the complex phenomenon of occupation (Yerxa, 1989). Yet, although getting occupational science into the main stream is not a new idea, the majority of occupational scientists at present are still occupational therapists.

Getting occupational science into the main stream will facilitate interdisciplinary collaboration on occupation-focused projects and research, increasing opportu-

nities for funding. Collaborative projects which involve large teams of researchers with diverse skills and interests are more likely to attract long term funding. The outcomes of interdisciplinary exploration of occupation and collaborative occupation-focused projects include an increased knowledge base for occupational science and a greater awareness of occupational science among academics and the general public.

Raising the general public's awareness of the occupational perspective adopted by occupational science will encourage people to start thinking about what they do and why they do things. Once aware of the links between occupation, health and the environment, the general public can become advocates for occupational opportunities and choices within their communities and support community-based, occupation-focused facilities and programs. Pressure from constituents can have a powerful effect on policy makers, at local, state and national levels. Ultimately, the translation of evidence from occupational science research to public policy is the ideal outcome for getting occupational science into the main stream.

The aim of my paper is to stimulate ideas for making occupational science more visible in Japan and getting it into the Japanese main stream. I begin by telling the story of the Australasian Occupational Science Centre (AOSC) which was specifically established to promote an occupational perspective. I describe some AOSC projects to illustrate the strategies adopted by AOSC to get occupational science into the main stream and to provide some examples of projects which could be used as models in Japan. To conclude I make some recommendations based on my experiences at AOSC. These recommendations will be relevant to those people in Japan who choose to be proactive in promoting occupa-

tional science.

### The story of AOSC

The Australasian Occupational Science Centre was established in January 2005 as a vehicle for making occupational science visible - locally, nationally and internationally. AOSC is located at the Shoalhaven Campus which is a new satellite campus of the University of Wollongong, a large regional university servicing the south coast of New South Wales. It is important to note that there is no occupational therapy program at the University of Wollongong and to date, I am the only occupational scientist. Although the University accepted my proposal to establish AOSC, no university funding was provided. However, I was appointed as an Honorary Research Fellow of the University of Wollongong so I could apply for funding from government and private organizations.

The first source of funding for AOSC came from the Shoalhaven community. A fortunate meeting with a local resident resulted in the formation of a not-for-profit company, AOSC Pty Ltd, whose sole purpose was to establish AOSC at the Shoalhaven Campus. Some high profile local business people were recruited to form the Board of this company. Collectively, their contribution as voluntary Board members was valued as \$10,000 in in-kind support. Within three months of its formation AOSC Pty Ltd received donations totaling \$20,000 from local businesses and \$25,000 seed funding from the Shoalhaven City Council. Three months later, an application to the Australian Federal Government's Regional Partnership Program for \$55,000 to match the funds received from the community, was successful.

So, within six months of getting approval from the university, AOSC had \$110,000 for its first project which was designed to promote an occupational perspective to the local Shoalhaven community. Subsequent AOSC projects were funded from a variety of sources until July 2007 when the University the University of Wollongong appointed me to a half time position to continue developing AOSC activities.

The mission of AOSC is to promote an occupational perspective through occupation-focused research and community education projects. The long term goal of AOSC is to positively influence social, economic and

political development, as illustrated in Figure 1. Different strategies have been adopted by AOSC to achieve its objective of increasing the visibility of occupational science and getting it into the main stream. Examples of how AOSC has implemented these strategies are now provided as they may stimulate ideas for getting occupational science into the Japanese main stream.

#### Strategies for making occupational science visible

Since it was established, AOSC has been active in achieving its mission despite having minimal financial resources and no local occupational science network. Such limitations as well as the desire to maintain the support of the university have prompted the development of a range of interesting strategies. These strategies have resulted in some creative projects and innovative partnerships.

#### Conducting occupation-focused education programs for the local community

Conducting community education programs that focused on the relationship between health and occupation was the first strategy used by AOSC to promote an occupational perspective to the Shoalhaven residents. *Do It Now* was the first AOSC project to adopt this strategy.

The purpose of *Do It Now* was to educate up to 200 Shoalhaven residents aged 55 years and over about the importance of planning what they are going to do in retirement and the need to stay involved in community activities during their retirement. Participants in the project received information about local resources for older people and in return, provided data on what they are doing in their retirement, want to do in retirement and what they see as barriers to the things they want to do.

From October 2005 to June 2006, twenty education programs were conducted for a total of 171 Shoalhaven residents aged 55 and over. Seven of the programs targeted people aged 55-64 years and focused on preparing for retirement. These programs were held in the evening at the Shoalhaven Campus and involved 1 x 3 hour session. The remaining 13 programs were held during the day at various community centres throughout Shoalhaven to maximize accessibility and conven-

ience for the participants aged over 65 years. These participants attended 2 x 3 hour sessions.

At the start of the first session in each *Do It Now* program, all participants completed a questionnaire designed to gather demographic data as well as information about their occupational interests and level of participation in community based programs. A second questionnaire was designed to gather follow-up data and to evaluate the effectiveness of the program. The follow-up questionnaire was administered approximately three months after the sessions. An experienced, independent researcher conducted these follow up telephone interviews. In brief, analysis of the evaluation data gathered from 121 participants revealed that:

- 99% enjoyed the Do It Now Project
- 99% agreed that participation in community activity positively influences health
- 50% of those already participating in community activities intended to take up new activities
- and of the 11 respondents who were not participating in community activities at the time of interview, 8 (73%) intended to take up community activities in the future.

You can access more detailed information on the evaluation of the *Do It Now* project as well as recommendations for conducting community occupation-focused projects from the report which is available online (Wicks, 2006).

#### Undertaking interdisciplinary projects

Undertaking interdisciplinary projects has been a valuable strategy adopted by AOSC for getting occupational science into the main stream at the University of Wollongong (UOW). To date, AOSC has collaborated with colleagues who specialize in Health Informatics, Education and Creative Arts. Each interdisciplinary project has been very different. Collectively they have been effective in raising the visibility of occupational science among the UOW academics and students involved and the members from the general public who participated.

*Health-e ageing* was a small interdisciplinary pilot study funded by a University of Wollongong grant. My co-researcher was from the discipline of Health Informatics.

The aim of the project was to examine if Internet access

and Internet use promoted health and well being in older adults by increasing their social connectedness.

The project involved training older people in the basic skills required for Internet use. At the training session all participants had a 'buddy', who was a tertiary student. The buddies were available via telephone to offer support for a specified period post workshop. Details about the design of this project can be found on the AOSC website (AOSC, nd).

*Learning and Teaching Creatively* was another interdisciplinary project which involved collaboration with the Faculty of Education and a local, yet internationally renowned community arts centre, Bundanon. This project was conducted in 2006 and was also funded by a university grant. The aims of the project were to enable education students to experience and understand the process of creativity and to transfer their new understandings about creativity to their practice as teachers during their fieldwork placements in schools. The students participated in creative occupations in workshops with local artists at the Campus and attended two, two day retreats at the arts centre where they experimented with a range of creative media. Learning through doing and reflections on personal creativity were critical elements of the project.

There were many positive outcomes of this project for students, staff and for regional development (Wicks, 2007). In terms of increasing the visibility of occupational science, subsequent presentations and publications on the project have helped raise awareness of some key occupational science constructs such as: the role of culturally sensitive contexts and supportive communities in transformation through creative occupation (Whiteford & Wright St Clair, 2005, Dickie, 2004) and self actualisation through creative occupations (Blanche, 2007).

*Creative play with everyday things* was collaboration with the Faculty of Education and involved those students undertaking a Graduate Diploma in Education at Shoalhaven Campus. The students were assigned the task of investigating sources of cheap, recyclable materials that could be used for creative play. The students then conducted a series of workshops to demonstrate to school children, parents and teachers how to use these materials for creative play occupations. The out-



come of this project was a resource book for parents and teachers that emphasized the importance of physical, creative and cognitive occupations for the development of healthy active children.

*The digital storytelling project* was collaboration between AOSC and the University of Wollongong's Faculty of Creative Arts. The project was incorporated into the curricula for the third year students in the School of Art & Design undertaking a course in Interactive Multi Media. The aim of this project was to create attractive and stimulating digital stories that highlighted the health benefits for older people when they participate in engaging community-based occupation-focused programs. The students were allocated to groups of three. Groups were assigned to one of six local community programs for older people. The students attended the program, gathered information about the program, recorded interviews with program participants, and took videos and photographs. Then the students developed a short, web-based, interactive story that presented the essence of the program and gave insight to the value of the program for the participants. At the conclusion of the project, there was an exhibition of the students' work. University staff, other students and the general public were invited. This exhibition was an effective way of getting the message about healthy ageing through participation into the main stream.

#### **Forming networks**

The Inaugural International Occupational Science Think Tank hosted by AOSC in July 2006 has resulted in the formation of international networks. Such networks are now facilitating occupational science research and education programs around the world which, subsequently, are increasing the visibility of occupational science internationally. A key strategy of the think tank was providing opportunity for occupational scientists to meet and dialogue face to face in a relaxed and comfortable setting.

Additional information about the Inaugural Think Tank and recommendations for future think tanks are available from the online report (Wicks, 2006 a).

#### **Forming partnerships and engaging with the community**

Another strategy adopted by AOSC for getting occupa-

tional science into the main stream is forming partnerships with community organizations. This strategy of university-community engagement is endorsed by the University of Wollongong, a member of the Australian University Community Engagement Alliance. A key principle of university-community engagement is the mutually beneficial exchange of knowledge and expertise between universities and communities (AUCEA, nd)

AOSC has formed an interesting partnership with the Historic Homes Trust, an Australian statutory authority entrusted with the care of historic buildings and sites in New South Wales. One of the Trust's historic homes is Shoalhaven's Meroogal, a home to four generations of women from the same family. Meroogal runs an annual art competition. In 2008 AOSC partnered with Meroogal and set the theme for the competition, Celebrating the everyday things women do. AOSC also established a prize for the art work that best depicted an occupational perspective.

In addition to the public exposure AOSC received through the marketing of the 2008 Meroogal Women's Art Prize, AOSC staff participated in workshops to inform the general public about an occupational perspective and the relationship between engagement in everyday occupations and health and wellbeing.

#### **Being an entrepreneur**

Underpinning all the strategies described above is the strategy of being an entrepreneur. The Merriam-Webster Online Dictionary (2008) defines an entrepreneur as a person who "organizes, manages, and assumes the risks of a business or enterprise". According to Hertz et al (2005), "being an entrepreneur combines innate and learned characteristics such as creativity, flexibility, and determination" (p.1).

At AOSC, being entrepreneurial has led to some specific marketing strategies to promote occupational science to the main stream. For example, AOSC now has its own logo for branding purposes and a portable banner which is displayed at any events or programs supported by AOSC. Media releases, radio interviews and newspaper articles have all helped to 'sell' occupational science.

#### **Recommendations for getting occupational science**

### into the main stream

When I reflect on the journey taken by AOSC to get occupational science into the main stream, I realize that none of the strategies adopted would have been successful without some entrepreneurial spirit. For me, being entrepreneurial was a necessity, arising from lack of funding and a very strong desire to give occupational science the recognition and acknowledgement it deserves. As I now appreciate the importance of entrepreneurial spirit in the AOSC story, I recommend those of you seeking to promote occupational science to consider the following entrepreneurial strategies identified in the literature (Hertz et al, 2005, Pattison, 2006). Handy, (2002)

- *be willing to take risks*
- *think outside the square*
- *persevere*
- *look at the big picture*
- *have a vision*
- *look at things differently by adopting a 'third eye'* (Handy, 2002, p. 75)

Hindsight is indeed a valuable tool when evaluating progress and understanding what has been effective in achieving a goal. Although AOSC still has a long journey to travel in its mission to get occupational science into the main stream, by looking back I can identify some other important strategies to recommend to others on a similar mission:

- *use the resources of your local community*  
Often, important skills and expertise can be found in your own 'back yard'. I found that members of my local community want to learn about new ideas and how to help themselves. From my experience, people are interested in the concepts of occupational science. People can readily understand what occupational science is all about. It is not rocket science. We just have to know how to speak about occupation so people can relate to it.
- *use language that is occupation focused at all times*  
Being consistent in language helps people to become familiar with occupation-based ideas and then they will use the language themselves.

- *market occupational science proactively*

Do not wait for someone to contact you first. Seek out the people whom you feel should be informed of your projects.

- *make an investment now for the future of occupational science*

I have found that most contact and liaison leads to something even though there may not be an immediate outcome. It is also important to follow up contacts you have made previously.

- *maintain your passion for occupational science*

If you fervently believe, like I do, that occupational science has the potential to inform professional practice and contribute to social policy, then it is not difficult to stay focused on your mission. Since my introduction to occupational science in 1993, an occupational perspective pervades my world view, so continuing to be passionate is relatively easy for me.

- *think big but start small*

Adopting an entrepreneurial spirit is crucial to effectively get occupational science into the main stream. However, initial projects of entrepreneurs need only be small. Collectively, many small projects can make more of an impact than a large project that is under resourced or insufficiently prepared. Remember: A small pebble dropped into a pond creates ripples. But many ripples will create waves.

### Conclusion

In Australia at the present time, occupational science is, metaphorically, only a small tributary of the main stream. I suspect the situation is similar in Japan, despite the growing number of people in Japan who are interested in occupational science. But being small does not prevent the development of some grand plans. The establishment of AOSC and the various projects undertaken to date show it is possible to effectively promote occupational science and to get it into the main stream.

I have briefly recounted the story of AOSC and

described the projects AOSC has undertaken to date. My purpose in doing so is to stimulate you to think how you could develop some occupation-focused projects within your communities and collaborate with colleagues from other disciplines and organisations to make occupational science visible in Japan. I hope that reading this paper will germinate some ideas and stimulate some people to take action.

I believe it is critical that many people who acknowledge the potential of occupational science start to promote it. It seems to me that it is the right time to start, and I see no sound reason to delay. Do It Now!

### References

- AOSC. (nd). *Australasian Occupational Science Centre*. Retrieved September 9, 2008, from <http://shoalhaven.uow.edu.au/aosc>.
- AUCEA (nd). *Australian Universities Community Engagement Alliance Inc.* Retrieved September 9, 2008, from <http://auceca.med.monash.edu.au:8080/traction>.
- Blanche, E. (2007). 'The expression of creativity through occupation'. *Journal of Occupational Science*, 14(1), 21-29.
- Dickie, V. (2004). 'From Drunkard's path to Kansas cyclones: discovering creativity inside the blocks'. *Journal of Occupational Science*, 11(2), 51-57.
- entrepreneur. (2008). In Merriam-Webster Online Dictionary. Retrieved September 9, 2008, from <http://www.merriam-webster.com/dictionary/entrepreneur>
- Handy, C. (2002). *The elephant and the flea*. London: Arrow.
- Hertz, N., Bondoc, S., Richmond, T., Richamn, N., & Kroll, C. (2005). Becoming an entrepreneur. *Administration and Management. Special Interest Section Quarterly*, 21(1). Published by the American Occupational Therapy Association.
- Pattison, M. (2006). OT - Outstanding talent: An entrepreneurial approach to practice. *Australian Occupational Therapy Journal*, 53(3), 166-172.
- Whiteford, G. & Wright St Clair, V. (eds) (2005). *Occupation and practice in context*. Sydney: Churchill Livingstone.
- Wicks, A. 2006, *Occupational science: generating an international perspective: Report on the Inaugural International Occupational Science Think Tank*. Nowra: AOSC. Available at: [http://shoalhaven.uow.edu.au/aosc/publications/international\\_think\\_tank\\_2006.pdf](http://shoalhaven.uow.edu.au/aosc/publications/international_think_tank_2006.pdf)
- Wicks, A. (2006 a). *Do It Now: Promoting participation in engaging occupation during retirement. Report on the 'Do It Now' Project*. Nowra: AOSC. Available at: [http://shoalhaven.uow.edu.au/aosc/publications/do\\_it\\_now.pdf](http://shoalhaven.uow.edu.au/aosc/publications/do_it_now.pdf).
- Wicks, A., Cambourne, B., Collins, R, & de Roo, M. (2007). *Reflections on community engagement for transforming praxis: Lessons from the Learning and Teaching Creatively Project*. In 4th Annual AUCEA Conference Proceedings - *The Scholarship of Community Engagement: Australia's way forward*. (pp 104-110). Victoria, Australia: The Australian Universities Community Engagement Alliance Inc. ISSN 1833-4482. Available at: [http://shoalhaven.uow.edu.au/aosc/publications/2007\\_aucea.pdf](http://shoalhaven.uow.edu.au/aosc/publications/2007_aucea.pdf).
- Wilcock, A. (2006). *An occupational perspective of health*. Thorofare: Slack.
- Yerxa, E. (1989). An introduction to occupational science: a foundation for occupational therapy in the 21st century. *Occupational Therapy in Health Care*. 6(4), 1-17.